〔翻刻〕鷺流間集（一）

稲田秀雄

ここに翻刻するのは、本学附属郷土文学資料センター所蔵（もと山口県立大学蔵。平成十五年度より附属郷土文学資料センターに移管）の鷺流間狂言資料『鷺流間集』（外題による）である。本書は奥書を有しないが、その特徴ある筆跡から、山口鷺流の元祖・春日庄作（明治三十年没）の自筆本と認められる。はじめに簡単な書誌を記す。

写本一冊。外題「鷺流間集」（表紙中央に墨書。本文とは別筆）。表紙（厚紙）は後補。袋綴。料紙は楮紙。縦二十四、〇センチ、横十六、三センチ。一面行数七～十行。全八十四丁（遊紙なし）。印記なし。奥書なし。なお、乱丁が一カ所あり、四十三丁と四十四丁（「舟弁慶」のうち）が逆順に綴じられている。今回この箇所については、正しい順序に改めて翻刻することにした。

本書に収める曲は、以下の通りである。

〇第一巻　関原与市　橋弁慶　七騎落　弓八幡　六浦　八嶋　高砂　敦盛
　　巴　邯鄲　田村　安宅　舟弁慶

〇第二巻　御裳濯　賀茂　竹生嶋　老松　和布刈　白楽天　箙　兼平
　　頼政　朝長

以上二十三曲の間狂言詞章を記す。早打アイ、アシライアイから語リアイ・末社アイ・劇アイまで、多様な形態の間狂言を収めている。居語リの場合には、語リの詞章だけではなく、その前後のワキとの問答も記しているのが特色である。

鷺流のまとまった間狂言詞章については、すでに公刊されているものが二種ある。仁右衛門派のものとしては、佐渡鷺流狂言研究会編『佐渡鷺流間狂言』（真野町教育委員会、平10）に、佐渡伝存の間狂言資料三種（若林本・安藤本・天田本）が翻刻されている。また、伝右衛門派のものとしては、竹本幹夫氏・山本和加子氏「鷺流狂言伝書『間之記』（一）～（三）」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』7～9、昭63・3～平2・3）に、実践女子大学常磐松文庫蔵『間之記』の全体が翻刻されている。

本書の書写者である春日庄作は長州藩の狂言役者であり、鷺寛太郎（十代鷺伝右衛門）に師事していたことが明らかになっている。したがって、右に掲げた常磐松文庫蔵『間之記』と同じく、本書もまた鷺伝右衛門派の間狂言資料と考えられるが、常磐松文庫蔵『間之記』には見えない曲目もあることが何より注目されよう。すなわち、「関原与市」「七騎落」「弓八幡」「六浦」「八嶋」「高砂」「敦盛」「田村」「安宅」「舟弁慶」「賀茂」「老松」「和布刈」「箙」「兼平」「頼政」「朝長」の十七曲がそれである。

現在、郷土文学資料センター蔵の間狂言資料は、本書を含めて四種ある。

①鷺流間集　一冊（本書）
②鷺流語り間書抜（内題　語り／間書貫）　一冊
③鷺流間書抜（内題　アシライ／間言葉書）　一冊
④近藤蔵書　鷺流間集　十冊

①②③は春日庄作自筆と考えられるが、④は春日庄作の弟子であった近藤直三の筆写になるものである。

現在の山口鷺流では、残念ながら間狂言に関する伝承が途絶えてしまっており、保存会会員が間狂言として能に出演することはない。しかし、伝書はこのように残されているのであり、将来における復活ということも視野に入れつつ、ここに本文の翻刻を企図した次第である。

なお、紙数の関係で、翻刻は二回に分けて行なう予定である。今回は第一

巻のみの掲載とする。

【凡例】

一、基本的に原本に忠実に翻字することにしたが、読解の便宜上、以下のような措置を施した。

一、漢字は原則として新字体に統一した。

一、繰り返し記号（踊り字）については、二字以上の分は「〳〵」、一字分は、漢字の場合は「々」、平仮名の場合は「ゝ」、片仮名の場合は「ヽ」に、それぞれ統一した。

一、合字の「ゟ」は、「より」に改めた。

一、句点を打つべき箇所は一字空きとした。原本に区切り符号が記されている場合はそのまま翻刻した。

一、極端な当て字または誤字のため、その語の意味が分かりにくいと判断される場合は、正しい漢字を括弧に入れて傍記した。

一、せりふとせりふの間は二字空きとした。

一、訂正（抹消・補入）のある場合は、訂正された本文のみを翻刻した。

一、語リアイ、特に居語リの場合は、問答・語リ・問答に段落を分けた。

その他、アシライアイの場合も場面によって適宜改行を施した。

一、演出に関する注記はおおむね二行割注になっているが、印刷の都合上すべて一行に統一し、ポイントを落とすことで示した。

一、役名はすべてポイントを落とし、右ヨセとすることで統一した。

一、原本に節記号が付されている箇所は〽で括ることによって示した。

一、問題のある箇所については、適宜注を施し、その内容について末尾に記した。

【翻刻本文】

鷺流間集

第一巻　鷺流間集目録

一　関原与市　二　橋弁慶
三　七騎落　四　弓八幡
五　六浦　六　八嶋
七　高砂　八　敦盛
九　巴　十　邯鄲
十一　田村　十二　安宅
十三　舟弁慶

第二巻

一　御裳濯　二　賀茂
三　竹生嶋　四　老松
五　和布刈　六　白楽天
七　箙　八　兼平
九　頼政　十　朝長

一　関原与市　シヤベリ　狂言上下　右ノ肩ハズシキヤハン袴ク、ル　シテツレ　掛合スミワキ柱ノ方スワルト杖ヲ付出ル

狂言「ヤレいそかしや〳〵　ト言ウテ出名乗座ニ立チ　か様に候者は関原与市殿江仕へ申ス下々ニて候　扨も与市殿忝も此度美濃国中川の庄ヲ鎌倉殿より給ワツテ只今御入部ニて候間道々そふじ等ヲ気ヲ付不都合無之様に仕れとの御事也　相かまへて其分心得候へ〳〵

二　橋弁慶

ヲモ「ア、かなしや　ァ「ノう〳〵是ハ何ニとした事じや　ヲ「ア、かなし　トコケル　アト手ヲ取「ノウ〳〵是レハ何ニとした事じや　気を付ケさしませ　ヲ「たれしや〳〵　ァ「身共じや　気を付ケさしませ　「イヤ

跡から他れそおつかけてハこぬか　ァ「イヤ〳〵たれもおつかけてハこぬ
何ニとした事しや　「先ツ心をおちつかしてゆおふ　ァ「夫レかよかろふ

「ハア、イヤ。此方ハ何ニとして是江(ママ)是江(ママ)おりやつたそ　「イヤ某ハ。東山の辺り江用事の有ツテ。出かけたが。和こりよかあまり取りみたしてにくるによつて。何ニ事かと思ふて付いて来たが。何ニとした事じや　ヲ「イヤ扨々こわいめニおふた事じやが。構て此後タ(ノッタ)。五条の橋の辺りを夜は通らしますなよ　「夫レハなせに　「されば其事じや。けふハ天気もよいによつて。祇園清水の大仏なそへ参ツテ。夫より日も暮々によつて。戻ふかと思ひ五条のはしを通りかゝつたれハ。年の頃ハ十二三とも見ゆる若衆が。女か男か夫レまてハ見分ケ兼たが。何ヅ方より出(ママ)ツタか知らぬが。白ィきぬをかむツテ。居て。身共見るとひらりときぬ(ママ)きすて。何ニか氷の様成る太刀をすらりとぬきはなし。身共江目をかけ切ツテ掛るによツテ。肝モ魂ィもきへうせ。イヤ今切られたか。いまつかれウと。思ふて。逃ケテ来た所て。此方ニ出合ウたが扨々あまの命ひろふた。アー恐ろしやの〳〵　ァ「扨々夫レハあふない事て有ツタ　ヲ「イヤあれは何に者で有ふぞ　「イヤ此頃聞ケバ。アノ五条の橋の辺りに(ママ)ニて。千人切りとやらをすると言ウ事を聞イタガ。定メテそれで有ふよ　ヲ「イヤ某シも其様に聞イタガ。此御政道たゝしい御代に。左様な事をする者ハあるまいとおもふが。扨々にくひヤツジヤ　「其通りしや　ヲ「さりながら身共(注1)あまの命をひろふたによつて。此後た某の命ハなかゝろふよ　ァ「五百八十年　ヲ「七廻り　両人「一段と目出度イ　笑

「夫レハそふじやが。身共ハ何とやら後ロかうめ(ママ)くよふ。若シツカレハせぬか　見(ママ)くれさしませ　ァ「ドレ〳〵見せさしませ　ヲ「心得た　ァ「是ハいかな事　「ヤア〳〵何ニとじや　「したゝか切られた　「アーかなしや〳〵(カナシヤ)　ァ「笑ヒ　ァ、扨々おくびよふな人じや。ヤイ〳〵是ハざれ事じや。どこも切られハせぬ。是レ〳〵気をたしかに持テ　ヲ「ヤア〳〵切られハせぬか　ァ「其通りしや　ヲ「夫レハ誠か　しんじつか　「誠じや　一定しや　ヲ「切られハせぬ　ァ「中々　「あゝらきよくもない。其様に言ウておどすと言う事か有るものか　「イヤ十角(兎)しあん(注2)のして見るに。爰に居てハさいぜんのくせ者が。しかけてこふも(ママ)。身共ハも早爰ヲのくそ　ヲ「アー是レ〳〵某もつれてのいて下されい　ァ「イヤ〳〵身共ハ知らぬ。にぐるぞ〳〵　「あゝ是々それはあまりなさけない。先ツまつて下されい。南無三宝はやにけて行ハ。イヤ某シハこしか立々ぬ。のふ〳〵かなしや。先ツまて〳〵

三　七騎落チ

ワキ一声ィ　ワキ弓はり月の西のそら行江定めぬふなじかな　ワキノ跡江付出ワキ舟江乗ると狂言舟ノル　ワキ諷スムト狂言諷　狂言「磯うつ波の音まてもときの(ママ)おそろしや　ワいかに他れか有　あれニ舟(ママ)候　いそ(ママ)ておし付ケ候え　狂「畏て候　夫レより仕テトワキト言葉掛合イアツテ　ワキ「じかいをせんと思ひ切り腰の刀に手をかくる　狂「アゝもつたいない〳〵　爰ハ流儀によつて色々違ヒ有　ワキ方聞々合せツトムル也

四　弓八幡

ワキツレヲ呼ヒ出シ言葉有　ワキツレ橋掛り方来テマクノ方江向キ　ワキヅレ「当浦(ママ)の者の渡り候か　狂言一ノ松江立　当浦(ママ)の者に御用とハ他れニて渡候そ　ワキツレ「ちと物を尋子度事の候間此方江来テ給り候え　狂「心得申候　ワキ前江行キスワリ　狂「当浦(ママ)の者に御尋子被成度トハいか様成る御用ニて候そ　ワキ「おほしめしよらざる尋子事ニて候え共当社の神ヒ亦は男山の子細御存シニおぬてハ御物語候え　間「是ハ思ひもよらぬ事仰(ママ)せ候ものかな　我等ハ当浦(ママ)に住ム者とハ申せ共左様成る事ハ存せぬ事ニて候　さりなからはしめての御方の御尋子有るを一円存せぬと申もいかゞなればあら〳〵承り及ヒたる通り御物語申そふづる　ワキ「近かころニて候

抑々昔シ神皇(ママ)宮異国のゑびす御退治の御時我か朝の神々を語らい御申有ハ長門の国豊浦郡ニて舟木山江登り分ケ入て楠ノ木壱本切り取りて舟四拾八双(ママ)

を御造り有りて九州松浦の湊にうかめたもふ　猶おも計略の其為めに長門国の沖に檀の附(籐)キ異国調伏の法をとりおこなわれんと皇宮(ママ)ハ四王寺の峯に御上り有りて宇賀玉(注3)の木の枝に五十の横金(ママ)の鈴をむすび付ケて七日七夜のしやウしんにして夫より異国江思シめし立てさせられ一双(ママ)の舟にめされたる御神ハはや余の舟ニは御座有間敷ヰ事成るにいつれの舟ニもはや神々の乗り移りたまひ神力を持ツテ三漢(韓)の御随え被成目出度御帰朝有り頓而御産の紐をときたもふ　折りしも天より白幡四(ママ)なかれふり下だりたると申　さ有るニ仍て御名を八幡宮と申奉るよし承り及ヒテ候　亦其時に王城近かき所江宮居成して弓矢の守護神となろうずると思シめし八流れのはたを虚空になげたまえば此幡の落ヲたる所を御鎮座になされんと有ルれハ忝も王城の南東山此男山の峯に彼ノ幡落ヲとゝまりたるに仍て当山を八幡山と申て此所江御影向の御年か卯の年の卯の日ニて御座候をとりあえず神楽を参らせしにより初卯の御神楽(ママ)申(ママ)てハ年中に七拾四度の御神楽とハ申ス　其内ニも今日の御神拝いか初卯の御(ママ)楽と申名付ケて是を本に取りおこのふも則ヲ此子細成るよし承り及ヒテ候其外当社の御神秘数多有之よしニ候え共先ツ我等の存たるハ如此候

ワキ「念ころに語られ候ものかな　尋ね申も余の儀(ママ)あらす　方々以前に老人の弓を袋に入持ヲ若き男を友ない来られ候間言葉をかわして候えハ当社の神秘亦桑の弓の子細くわ敷物語り申シ其後誠の姿を見せ申さんといゝもあへす其まゝすかたを見うしのふて候よ　間「言語同断(ママ)　寄得(ママ)成る事を仰せ候物かな　左様にいつく共なく老人の若キ男ヲ友ない来られ候者我等ハ此辺りニて覚えず候　是ハ正敷当社の一ノ末社の神ニて御座有ふづる　誠に不思儀(ママ)成る事ニて候間しばらく是に御滞留ナツテ重ねて寄得(ママ)を御覧ンなれかしと存る　ワキ「あまり不思儀(ママ)成る事ニて候間しばらく滞留申重ねて寄得(ママ)見よふづるニて候　間「御用の事もあらバ被仰候え　ワキ「頼ミ候よ　間「心得申候

五　六浦

間「是レハ六浦の里に住ム者ニて候。今日ツた物さび敷折からなれバ。正明(称色)寺の辺り江参り心をなくさまばやと存る。イヤ是成御方ハ此辺りニて見なれぬ御方ニて候が。いつれよりいつ方江の御通りなれハ。此所ニ御座候そ

ワキ「是ハらくよウへんの僧ニて候か。方々ハ此辺りの人ニて渡り候か　間「さん候(注4)　ワキ「左様に候ハ、先近ウ御入候え。物を尋子度キ事の候　「心得申候　扨而御尋子被成度トハいか様成御用ニて候そ　「思シめしよらざる尋子事ニて候が。此所ニて此寺の紅葉子(ママ)細御存シにおぬてハ。語ツテ御聞せ候え　「是ハ思ひもよらぬ事を仰せ候物かな。我等ハ此辺りの者とハ申せ共。左様成る事ハ存せぬ事ニて候。さりながら。始めての御方の御尋子有を。一円存せぬと申もいかゝなれハ。あら〳〵承り及ヒた通(ママ)り御物語り申そふずる　「近頃ニて候

去ル程に当寺のかひさんな一偏証(遍上)人ニてまします。いよの国高野(剛)一そくニて有しか。三十じあまりのころよりこつぜんとほつしんのおこし。黒谷法念(然)上人より五代目の御弟子ト成り。名おば智身房(ママ)と申ス智者也。智恵も同心(道)も深かくして。後ヲニハ一偏上人ニ成たもふ。然るに此国御滞留の間に当寺を御建立被成。念仏ざんまいの道成(場)に定めんと。寺号を正明寺と申シかくれなキ御寺ニて候。扨而此寺御滞留中ニ是成る紅葉を植おかれしに。此木余の木に勝れ色よく紅葉ウ仕候を。当寺のかさりとて人々しようかん仕候を。寺僧達ヲもよろこひたまいしが。其後鎌倉の中内言(剛)為家の治(ジ)男。為祐の卿と申御方。在鎌倉被成しか有るつれ〳〵成るまゝに紅葉を見ント此所に参られ。見たまうに山々の紅葉いまだ成るりしに。此木(ママ)に余の木ニ勝れ色よく紅葉仕候を。為祐の卿取り合へす。いかにして此一ト本に時雨けむ。山に先キ立ツ庭の紅葉シばと。か様に永(詠)じたまいけれバ。草木心なしとハ言へとも。此木心におもふ様。我レ此古寺の庭の面に紅葉せしかバ。か様の御方の御永(詠)哥にあづかる事めんぼく。此上ェヤ有るべからずと思ひてや。其次ギの年よりして一ト葉も紅葉せすおのづから。青葉ニて落く葉仕候を。人々ふしん申され候が亦有る小さかしき人の申されけ(ママ)るイヤ是ハ有るためし有り。いにしへ都に墨そめの桜と申合せたるか。こふ成り名とけ(ママ)で身しりそくハ。天の道と心得。かように紅葉をとゝめたるやと有しかハ。いよ〳〵人々の木心をかんじたまいたるよし承り及ヒて候。先ツ我等の存シたるハ如此候

「念ころに御物語り候物かな。尋子申も余の儀にあらず。方々以前に女姓(ママ)

壱人来たられ候間。言葉をかわして候えバ。当寺の開山の子細。亦ハ紅葉のゆわれ只今方々の御物語りのことく。くわ敷物語り申。其後其身の上ヱ成るよしい、もあえず。草むらの影に入るよと見て。其ま、すかたを見うしないて候よ　間「言語同断　寄得成る事を仰せ候ものかな。左様にいつく共なく女姓の来たられ。物語り候者我等ハ此辺りニてハ覚えす候。是ハ正し敷すいりよふ申スに。御僧の御心中尊ウましますゆへ。紅葉の情ヒ仮りに女姓とあらわれ。声言葉をかわされされたるかと存候。扨も不思儀成事ニて候間。しばらく此所に御滞留成ツて。御経おも御とくじゆ被成重ねて寄得を御覧ンなれかしと存　「方々の申さるゝ如く。あまり不思儀の事ニて候間。しばらく滞留申有難キ御経おもどくしゆ仕り。重ねて寄得を見よウづるニて候

間「御滞留候ハ、ヤガテ夜の物をはこび。是ニて御宿を参らせよウずるにて候　ワキ「頼ミ候よ　間「心得申候

六　八嶋

間「か様に候者ハ。八嶋の浦に住ム者ニて候。此中ハ久しゆウ塩やを見まわぬニよつて。只今あれ江参り所おも見はからい。明日ハ浜おもならし塩を焼せはやと存。先ツいそいて参ふ。ハアー某の塩やの戸か明ケて有る。イヤ見れハ人の出入をしたか足跡か有る。はてがてんの行かぬ事じや。さればこそ見なれ申さぬ御僧の。案内なしに御座る。イヤ申々此方ニは何として夫レに御座候ぞ　ワキ「イヤ是ハ此家のあるじに仮り申て候也。　間「そふてハ御座るまい。主シハ某シニて候　惣而此所の大法ニて。人の塩やを某シのなむ事はならず。亦某シの塩やを人にまかする事は成り不申候に。方々出家の御身として。もうごばしおしやるか　ワキ「イヤ〳〵もうごハ申さず候。夫レニ付ちと物を尋子度キ事の候。先ツ近ウ御入候え　間「心得申候　扨而御尋子被成度キトハいか様御用ニて候そ　「思シめしよらする尋子事ニて候え共。此所ハ源平のたゝかひのちまたのよし承り及ヒ候か。御存シニおゐてハ語ツテ。御聞せ候え　「是ハおもひもよらぬ事を仰せ候ものかな。我等も此所の者とハ申せ共左様成る事ハ存せぬ事ニて候。さりなからはじめての御方のゆへ有りげな御尋子ニて候間。あら〳〵承り及ヒたる通り御物語り申そふづる。

抑々源平両家のたゝかひと申ハ。其比ハ元暦元年三月ヲ十八日の事成りしに。平家ハ海ミの面モ壱町ばかり舟をうかめて御座被成候か。源氏の方ニは此なきさに。朝サ早朝より打ヲ出〳〵たまウと申せ共。いか成る事やらぬ甲酉ノ時分までも御合戦無之候所ニ。沖の方より長舟一双なきさ近ウ押寄せ。波打きわに折立ツテ。大音上に名乗る様ハ。我こそハ平家の士ヒ悪七兵衛景清也。源氏の方に我レと思わぬ者あらばいざ立ヲ合ヒ申さんと言々ければ。源氏の方ニもつゝく兵わ者五拾寄はかり。中ニも三尾のやの四郎ト名乗り。真先キ掛ケて見えしかバ。景清も三尾のやを目掛ケて出合たまへ。火花をちらして合戦したもウ所に。大事成るかなや。三尾のや殿の太刀かはゞき元よりほつきとおれ候ニ付。三尾殿申さるゝ。御覧の如く。太刀打ヲおツテ力らなし。頓而差かへを取ツテ参り今一ト勝負申可しと。右輪をさして逃ケ行キたまふを。景清は三尾のや殿の甲の鞆をつかんで後ロヱ引留めたもふを。三尾のやハさわ成るましと前江イクビナツテ引たまふ。たがひにヱイヤ〳〵と引合いたもふ。其いきおひニは此段の浦が。大地しんのごとくゆらめき申たると申候。然れ共。互いに力ラままさりたるどふしの事なれハ。甲の鞆が鉢の所より引キちぎれて。両方ェかつとたおれたると申ス事ニて候か。景清ハあほむけにおすべりやつと申ス事て御座るか。定めてしりの割レメヱ石ふみが五ツ六ツも出来申たるやらむ。亦三尾や殿ハうつふせにおすへりやつたが。イヤ其頃ハ三月中旬の事なれハ。三尾やハ鼻の先きほツト落花致いたで有ふと申事ニて候。此外源平の戦ヒ様々有之とハ申せ共先ツ我等の存たるハ如此候

ワキ「念ごろに御物語り候物かな。尋子申も余の儀にあらす。我等都方の者ニて候か。此所はしめて一見ノ事ニて。此内ヱ尋子申て候えハ。老人ト若キ男の候而。一夜をこひ申候所。心よく一夜を宿り。亦源平のたゝかひの様。また義経よふたい只今方々御物語り之通。物語り申され候間。名を尋子て候えハ。義経の後のよの夢はしさましそといゝもあへず。其ま、すがたを見うしないて候よ　間「言語同同断。寄得成る事を仰せ候物かな。左様にいつくともなく老人と若キ男の居て物語り候者。我等ハ此辺りニ而不覚候。それ

こそうたかいもなき判官殿の御亡魄(ママ)ニて御座有ふずる。夫レをいかにと申ニ。此浦ニて御果ハ被成ず候え共。最前も申ことく色々面白き御合戦の有りたる所なれば。御しゆうしんの残されて。此所江あらわれ出テたまいたると存シ候間。今しばらく此所ニ御滞留成ツテ。判官殿の御跡ヲ念頃に御弔い被成。重ねて寄得(ママ)を御覧なれかしと存る　ワキ「実ニと方々の御申のことく。不思儀(ママ)成る事ニて候間。しばらく此所ニ滞留申。有難御経おもどくしゆし奉り。重ねて寄得(ママ)を見ようづるニて候　御滞留候ハ、。頓而夜の物をはこばせ。是ニて御宿を参らせふづるニて候　「頼ミ候よ　「心得申候

七　高砂　出立初番時ハ狂言素胞(袍)士烏帽子ワキノ跡付出ル

ワキヅレ仕て柱ノ所来て呼出ス　ワキヅレ「当浦の人の渡り候か　「当浦の者に御用トハ何ニ事ニて候ぞ　「先ツあなた江御入候え　物を尋子事(ママ)の候　「心得申候　「当浦の者ニ御尋子被成度トハいか様成る御事ニて候そ　ワキ「思シめしよらさる尋子事ニ而候え共此所ニおゐて高砂の子細亦住ノ江ト相生の松の事御存シニおゐてハ語ツテ御聞かせ候へ　間「是ハ思ひもよらぬ事を仰候ものかな　我等ハ此辺りに住ム(ス)者とハ申せ共左様の事ハ存せぬ事ニて候　さりなからはしめての御方の御尋子ニ而候間あら〳〵承り及ヒたる通り御物語り申そふづる　ワキ「近かころニて候

先ツ高砂の松とハ則チ是成る木を申候　然るに高砂住の江の松に相生の松と申ス子細はむかし上代の時よりも高砂の松ニたとへ万葉集ニせんぜらるゝ

今亦ゑんぎの御代ニは住ノ江の松ニたとえ古吟(今)のせんし給ふ事是はむかしも今も相ヒ同じ様々御座有れハとて古吟の序に高砂住ノ江の松も相生の様に覚ヱト印(ママ)シ置レたるよし承る　亦当社ト摂州住吉の明神トハ夫婦の御神なれば当社江住吉の御影向の折節も諸木様々多き中ニも松ハ一寸ニ成れハ上(ママ)千年のよわいをたもち雨露(ウロ)雪ニもおほれずして時輪(常磐)木成る物なれハとて松に植(上)へ越ス木ハ有間敷と思シめし我か宮居おも松諸共ニ有うずるとて則チ是成る神木を植へたまふより相生の松とも(ママ)　但シ是ハ此在所の者の申事ニて候　然るに住吉ト申ハ忝も摂州津守の浦ニ勅使を立られ御覧すれバ四本の松生ヱ出たり　是を祝ヒ御申有るにより住吉ニてハ松を御神松共亦ハ御神躰ともあがめ御申有りしと申候　古人の言葉ニもいさご長シテ岩おとなり積り津守(ママ)りて山と成り浜の真砂の数ハつくるとも当社住吉の御座有らむ程は男女夫婦の栄江和哥の道神道ニおゐて目出度御事つきまじいとの御事ニて候　先は相生の子細我等の存シたるハ如此候也

ワキ「念ころに御物語り候物かな　尋子申も余之儀にあらず　方々以前に老人夫婦来たられ松の葉をかきあつめたまふニより言葉をかわして候えば相生の松の子細只今方々の御物語り之通少シもちかわす物語り被申其後住の江ニもまち申へしと小舟に竿さして沖の方江出ると見て其まゝ姿を見失ないて候よ　間「言語同断(ママ)　寄得(ママ)成る事を仰せ候物かな　夫レハ正敷住吉の御神ニて御座有ふづる　それをいに(ママ)と申ニ当社江御参詣の御方ハ住吉江御参詣なくてハ叶わぬ事ニて候間住吉江御供申そふつる　是より余程ニ候間某此中新造の舟ヲとゝな(ママ)へ持チていまた乗初め致さす候ニ付方々様成る(ママ)御乗セ申ハ明賀(冥加)の事ニて候間御供申そふする　ヤかテおし付申候べし　ハアーアレ御覧ぜよ神慮にて追ヒ手の風か吹キ来タツテ候　いそき御舟ニめされ候へ

八　敦盛　間出立狂言上下　初堂出後堂(間)ニ入

間「か様に候者ハ須磨の浦ニ住ム者ニて候　今日た物さび敷折からなれハちと罷出心をなぐさまはやと存る　イヤ是成る御僧ハいつくよりいつ方江ノ御越シの御方ニて候そ　ワキ「我等ハ東国方より僧(ママ)ニて候か方々ハ此辺の人ニて渡り候か　「さん候　「左様に候ハゞ先ツ近ウ御入候へ　尋子申度キ事の候　「心得申候　扨而御尋子被成度キトハいか様成御用ニて候そ

「思シめしよらざる尋子事ニて候え共此所おいて(ママ)平家の君達敦盛はてたまいたるしたひ御存におゐてハ語ツテ御聞せ候へ　「是ハ思イもよらぬ事を仰せ候物かな　我等ハ此辺りの者とハ申せ共左様成事ハ存ぜぬ事ニて候　さりなから初めたる御方のゆへ有りげな御尋子ニて候間あら〳〵承り及ヒたる通り御物語り申そふずる　ワキ「近頃候

「去ル程に平家ハ寿永のころ津の国一ノ谷を城郭(郭)にかまへ御入有るを源氏

の方ニは則(範)頼義経を大将トシテ六万余騎を二タ手分(ママ)ケて押よせらる　判官殿ハからめての山より責め入り夜明ヶ方とおほしキ頃にどつとときを作りたまへハ平家ハ思わぬ方より責め入られおとろきうめき我先にと舟ニ乗り沖の方江と出たまふ　其折節門脇の修理の大夫経盛の御子ニ無官ノ大夫敦盛も御落チ有る時御非相(秘蔵)の青葉の笛をわすれて置セたまふを思ヒ出シたまひてイヤ我レハ取みだし名笛をてきに取られたと沙汰の有ツテハ御一門の名おれと思シめし本陣江取ツテかえし笛ヲおつとり亦此磯辺をさして御出有りしにもはや御座舟ヲ初めとして兵舟(ママ)のこらず沖の方江と成りけれハ波間にとやせん角やせんと思シ召ス所に後より武蔵の国の住人熊谷の治郎直実ト名乗りいかにや〳〵に御影ヶ見申せハ御大将共見えさせたまふかてきに後ロヲ見せたまふか御かへし有れと呼ばる程に敦盛も馬を引かへしたまいて一ト打二うち打合いたまいしがいざ我組マント馬の上ニてむつと組両馬か合にドウトおつる所を熊谷ハさすがの剛の人なれハ敦盛を組ふせ甲をおしのけ首をかゝむと見し所に薄化(ウスケ)しふにかね黒々と付ヶたまいて未タ年の程十六七の若若(ママ)武者のようがん美麗の御姿なりしかバ先ツ助ヶ参らせんと駒ニ打のせ奉り其身も馬に飛ヒ乗りて西ヲさしてぞいそぎけるに後ロの方より児玉等(党)おつかけ来り熊谷こそ二タ心にきわまつたり直実共に打取れと声々に申ス間力ラなく痛シなから御首を打チ落シ申されたるよし申候　扨夫より痛敷思ひ給ひ熊谷は元結ヒ切り黒谷の法念(然)上人の元江行御弟子トナリ名おハ蓮性法師とやらむ申て諸国をめくらるゝよし承り我等をはじめ此所の者共の申候ハあわれ此国江も来よかし引とらへてしつへいヲ七ツ八ツもあて種々になぶつてやらむと申おり候也

ワキ「念ごろに承り候物かな　尋子申候も我こそ元ハ熊谷治郎直実ニて候敦盛の御事あまりにいたわ敷存元結ヒ切か様の姿ト罷成り敦盛の御跡ヲ弔申さんと此所江参りて(ママ)也　言語同断(ママ)　左様の御方とハ存シ不申只今ハりうじを申めいわく仕候がそれされ(ママ)事　誠ハ左様の御方も御出あらハ御宿をも参らせ種々御馳走おもいたし供々(ママ)に敦盛の御跡ヲモ弔ヒ申さんと申居り候也

ワキ「そふ有らハしばらく滞留申難有(ママ)御経おもどク(ド)じゆし奉り重ねて寄得(ママ)見ようつるニて候　　問「御用の事もあらハ被仰候え　　ワキ「頼ミ候よ　　問「心得申候

九　巴

問「是ハ粟津の原に住ム者ニて候　今日た明神ノ御神事なれは参詣申サばやと存る　イヤ是レなる御僧ハ何国よりいつ方江の御通りなれハ此所ニ御座候ぞ　ワキ「是ハ木僧(曾)の山家より出たる者ニて候　方々ハ此辺りの人ニて渡り候か　　問「さん候　　ワキ「左様候ハ、先ツ近ウ御入候(ママ)　物を尋子度事の候　「心得申候　扨御尋子被成度トハ如何成る御用ニて候そ　　ワキ「思シめしよらさる尋子事ニて候か此辺りニて木僧(曾)義仲の御事亦ハ巴ト申女姓(ママ)事御存シにおゐてハ語ツテ御聞かせ候え　「是ハ思ひもよらぬ事を御尋子被成候物かな　我等ハ此辺りに住む者トハ申せ共左様成る事ハ存せぬ事ニて候　さりなから初めての御方のゆへ有りげな御尋子候を一円存せぬと申もいか、成れハあら〳〵承り及ヒたる通り御物語り申そふずる　　ワキ「近頃ニて候

扨而只今御尋子被成る、巴ト申女性ハ心剛ニして強ヨ弓の上々(ママ)ウ亦其外打チ物ヲ取ツてハ鬼(キ)神のも恐れす　亦いか様成るあら馬おも乗りすゆる事の上手ニていつにても一方の大将ヲ仕りても一度もふかくをとらす高名致され候が然かれ木曽(ママ)殿勢田宇治橋を中ニふられしより此方戦ヒ一度も里(利)なくして此辺りまで御落チ被成シ時ハ御情(勢)いわずか七騎ニて御落チ被成るれ共巴ハうすでもおわずして野の末山の奥までも付そへ主君の御供ばつくんに被致し所に義仲の被仰候ハ木曽ハさいごまて女をつれたると人のこうなんもいか、成るにより汝シハ女なれハしのぶ便りも有べしいそぎ古郷に帰り此よしを語るならバさいごの供ニハまさるべしとて様々ト御いさめ有しかバ巴ハ御請申心の内に思ふ様ハア、ラ御名残りおしの御事やあわれよからむてきも有らバ今一ト勝負仕り御覧ンニ入れ申度キト思ふ折節も遠江の国の住人内田ノ三郎と名乗り三拾騎はかり兵ヲ引ぐし押シ寄せ来たるを巴ハ見てあらうれ(ママ)や思ふま、成るてき来たり名残のはたらき今一チ度我君に御目ニかけんと勇サミ立チ大勢いの中江切り入寄せ来るてき切り払ヒ〳〵巴ハ内田を目かけたかいに馬の頭を引キならへ馬の上ニてむすと組内田をくもなく引寄セて鞍の前輪に内田

を引付首かき落シ左ノ手ニてさし上ケ是見たまへと義仲に見せ奉り夫より直様馬より飛ており木曽殿の御前ニ参り見れはや義仲ハ御自かひ有はや事切れおわしませハ巴ハ其まゝよろいをぬきすて御片身ニと御下たれをうちかすき只々しほ〳〵と打行ぬと申事ニて候　先我等の存したるハ如此ニ候也

ワキ「念頃に御物語り候物かな　尋子も余の儀ニあらず　方々以前に女性壱人来たられ此社に礼拝らくるいのていを見程不思ン成様子を尋子て候えハ義仲のさいごの次第亦巴の前の子細只今方々の御物語りことく少シも違わす物語り申其後いかにも其身上の事の様にいゝもあへず其まゝ書けスことく姿を見失うて候よ　間「言語同断　寄得成る事仰候物かな　左様にいつく共なく女姓の来られ物語候者我等ハ此辺り不覚候　是ハ我等の小ざかしき事を申様に候え共うたがう所もなき巴の亡魂ニて御座有ふつる　夫レヲいかにと申ニ木曽殿の御内に山吹巴と申て弐人の女武者の有りたる申ス　中ニも巴ハ此所まで御供申され御形見の数々給りて古郷江御下り有りたれハ一入御よしみの深かけれハ執心の残し置レ今亦御僧にまみへ給ひたると存候間暫く是ニ御滞留ナツテ巴の御跡を御弔ヒ被成重ねて寄得を御覧なれかしと存る　ワキ「方々の申さるゝ通りあまり不思儀事ニて候間しばらく滞留申難有御経おもどくじゆし奉り重ねて寄得見ようつるニて候　「御滞留候ハゝヤガツテ夜の物をはこばせ是ニて御宿を参らせふづるニて候　「頼ミ候よ　「心得申候

十　邯鄲

間女カツラ下タ面泊女帯ソハツギ　口明　枕持出作り物の内入置名乗座行

間「是ハ唐土邯鄲の里に住者ニて候　わらわ邯鄲の枕と申て寄得ノ有枕を持参らせて候　是ハ一とせ仙の法ヲおこない給ふ旅人に御宿を参らせて候えハ其おんじやうニとたわりて候か是にいすいまとろめバ腰方行末の事を見る枕ニて候間若シ御所望の御方もあらば此方江御申越シ候えヤア　ト名乗後見座ノ所江クツログ

仕テ出諷有ツテ橋掛り方案内カウ　是ハ流儀ニより色々有　仕テ方聞合せて勤　仕テ「いかに此内江案内申候　間「案内とハ他れ渡り候そ　イヤ旅人の御入り候そ先ツ内江御入有ツテ御腰ヲめされ候へ　ト腰桶江こしを掛ケさせて　間「是ハ何国よりいづ方江の御通り御方ニて候そ　間「夫レハ何の為の御通りニて候そ「それニ付わらわ邯鄲の枕とて寄得の有る枕を持チ参らせて候か是に一スイまとろめバ行末腰方の事を一度ニ見る枕ニて候間ちと御まとろみあれかしと存候　仕「其枕ハいつれにこれあり候ぞ　間「あれ成る大床に御座候をとのへ申そふするニて候　仕「さ有らバ夫レニてそとまどろ申候べし　「其間にわらわ、粟の飯イ

是よりワキ出色々仕舞等有り　諷の切りニ邯鄲の夢ハ覚めにけりと太鼓打切ルテン〳〵ヲ聞ト立チシテ前江行キ中けいニてたいフチトン〳〵トタ、キ　「いかに旅人御昼ル成り候え　粟の供ゴガ出来申て候　ト言ウて後見座江引也

十一　田村

間長上下　初堂出後堂入

「是ハ清水の門前に住ム者ニて候　此ほどハ世間も長閑ニて大方地主の花も開き申候間立越永めはやと存る　イヤ是成る御僧ハいづくより何ツ方江ノ御越シノ御方ニて候そ　ワキ「是ハ東国方より出たる僧ニて候　方々ハ此辺りの人ニて渡り候か　「さん候　「左様に候ハゝ先ッ近ウ御入候え　物ヲ尋子度事の候　心得申候　扨而御尋子被成度キトハいか様成御用ニて候そ「思シめしよらさる尋子事ニ候え共当寺の子細亦ハ坂上田村丸のよウたい御存シニおゐてハ語ツテ御物語り候え　「是ハ思ひもよらぬ事を仰せ候ものかな　我らハ此辺りの者トハ申せ共左様成る事ハ存せぬ事ニて候　さりなから初めての御尋子ニて候物ヲ一円存せぬと申もいかゞなれバあら〳〵承り及ヒたる通り御物語り申そふづる　ワキ「近頃ニて候

間「さる程に当寺清水寺と申ハ大同二年に坂ノ上田村の御願に御そウ〳〵有たると申よし承り及ヒて候　夫レヲいかにと申スニ昔シ大和の国に小嶋寺ト言ウ所に玄信といへる僧の有しか一段と尊ウシテしひしん深かくたつとかりし人なりしか正しんの観世音を拝ミ度ト思しめし候所に有時不思儀の夢の告ケ有りて淀ト川の水上より金色の光り立ツヲ御出テ有りて御覧ずれ壱人のこつぜんとして居たまふをいか成る御方そとたつねたまへハ我ハ是行恵居士

也ト答へまして汝シしやもんの心さしあらバ暫ク此所に住ミ壱人の檀(ダン)なをまちて大伽藍をこんりウあれとて東をさして行くと見えて夢覚ぬ　其時の行恵居士ハ観音の御事　亦壱人の檀那とハ田村丸のさして御申有ル　夫レをいかにと申ニ其後チ伊勢の鈴鹿山に鬼神の籠り行来の人を取り天下のなやみト成り候間頓て此よし奏門(聞)申候得ハ忝も帝江聞こしめし田村丸に戦(ママ)シあれとの勅使立ツを此事安からず思ひたまい其時観世音江立願に此度鈴鹿の鬼神を安ク随へたるにおゐてハ当寺に大伽藍のこんりウなすへしと有るにあらた成る御告などのましまして軍兵を催しかゝり給ふに神力仏力を以て鈴鹿の鬼神のしたかえたまへ(ママ)此寺の大伽藍ヲ大同二年に健(建)立有り　則寺号おバ清水寺ト名付置我朝に隠れなきれい地にましまして候　亦あれに見えたるハ田村堂とて田村丸の御ゑ(影)へすへ置れたる御堂ニて候也　当寺ニおゐて子細数多有りトハ申せ共先ツ我等の存シたるは如此ニて候也

「念ころに語られ候物かな　尋子申も余ノ儀にあらず　方々以前に童子のことく成る者壱人花守りていニて来たられ花の下タ清められ候間言葉をかわして候えハ当寺の子細亦ハ田村丸の子細くわ敷語り被申候間名を尋子て候えハ我かかへる方を見よといゝもあえす田村丸(ママ)堂の辺りニて姿タ見失ヒて候よ

「言語同断(ママ)　寄得(ママ)成る事を仰せ候物かな　左様ニいつく共なく童子如(ママ)く成る者の来り当寺の子細物語り候者此辺りニて不覚候　扨は御(ママ)御心中尊ゥましますゆへ田村丸仮(ママ)り花守(ママ)り現シ声言葉をかわされたるかと存シ候　余りに不思儀(ママ)成る御事ニて候間たとへいそきの御旅ヒ成共暫く是ニ御滞留成ツテ一ト夜成り共花おも御覧ン被成亦御経おも御誦(ママ)読被成其後何国江も御越シ有れかしと存る　「方々の言わる、如く不思儀(ママ)成る事ニて候間しばらく滞留申有難御経おもどくじゆ仕其後参り申そふつるニて候　間「御用の事もあらば被仰候え　ワキ「頼ミ候よ　間「心得申候

十二　安宅

問狂言上下細(ママ)サ刀　ワキニ付太刀持出　ワキ呼出ス

ワキ「いかに他れか有　間「御前に候　ワキ「山伏シの数多参り候ハ、此方江申(ママ)候　「畏て候　ワキツレノ所江カツス

間能(ママ)力ハ仕手子方惣シテツレノ跡ニ付出　出(注5)モキトウ無地の日(ママ)キヤハンク、ル　ヲヒカル(ママ)イテル　次第道行すミ地トリアリテ　能力　禾「へおれか衣ハ鈴掛の〳〵ヤぶれて事やかぎぬ(ママ)らむ〳〵　是より仕テ道行ッキ　花のあか(ママ)につきニけりト舞座江出る　能力ハ太鼓座江クツログ　仕「いかに能力　「御前ニ候　仕「汝がおひをめされ候間あなたへ差上候え　南法汝ニおゐて冥か成る事ニてなキか　能「誠に冥かに叶ヒたる仕合ニて候　シ「いそいて参らせ候え　ノ「畏て候　ヲイノ前ヲ向江ムケテ後ロヲ両手持　「是ハおそれかましゆ候　シ「亦タ汝ハ先キ江行関の様子を見て参り候え　「畏て候　口伝有　ノ「是ハいかな事　皆々の御供を致いて参るさへこわ物じやに山伏にかきつて通ウサヌ所江身共壱人参るハ何とも迷惑な事じやか是非ニおよばぬ　参らづハ成るまい　先ッそろり〳〵と参ふまでよ　ハシカ、リノ方行　一ノ松行　亦出シテ柱ト目付柱間見テ　「イヤうたがふ所もない　是じや　扨も〳〵おひた、しい事かなヤレ　あれからつうとあれまで関仮りヤと見へる　らむぐいさかもぎを引キイヤ中々鳥も通ヒさうでハないよ正面かけて見まわし　イヤ亦アノ木之本に黒イ物か見ゆる　イ(ママ)五ツ六ツも有るが何ニてあろふ　ヤアー山伏の爰じや　右ノ手アタマヱサシ　アー扨も〳〵きみのわるい事かな　何ニとしよウ　ヤ思ひ出いた　一首つらねて行かウ　山伏シハ貝ィ吹ィてこそにけにけり誰レおひ掛てアビラウンケン　イヤ是で引かれた物じや　ノケ〳〵　イヤ此よしを申上ウ　いかに申上候　関ノ様躰を見て参りて候えバイヤ中々らんぐいさかもギ鳥もかよわぬていニて候　亦片原の木の本に黒ヒ物四ツ五ツも見ゆる程に何ニそと尋子て御座れハ山伏シの爰しやと申(ママ)スよつて能々見て御座れハトキンヲかついたま、有のて御座る　あまりこわさに一首つらねてかへツテ候　「何ニとつらねて有そ　「山伏は貝イ吹ィてこそ逊ケにけり誰レおひかけてアヒラウンケンとつらねて候　「汝ハ小さかしきを(ママ)申候物かな　能力太鼓座江クツログ　延年の舞ト也ト此外また色々シテト掛合有之候也

是より仕テ皆々御立チ有ふづるニて候トミナ〳〵立諷　足よわ成(ママ)けなる　よろ〳〵とあゆミなり

間「いかに申上候　山伏達の数多御通りニて候　ワキ「心得て有　是より仕手ワキト色(ママ)言葉有ツテ　仕テ「夫ハ作り山伏こそ御留め被成りふづる　誠の山伏おも留めよ候か　間「イヤ左様におしやつてもきのふも三人まて切て掛ケておりやるそや　仕テ「其切ツタル山伏か判官殿か　「いらざるもむ

どふ無役（益）　壱人も通スまじく候　是より論儀（ママ）成り　関ノ人々きもをけし恐レをなして通しけり　「御通ウりヤれ　「いかに申上候　判官殿の御通りニて候　爰ニてワキ仕テト論儀（ママ）アツテ仕テ小形（子方）杖ニて打ツト　「打ツたり共通シハセまいそ　細サ刀江手掛る　諷（ママ）やりて後ヲ　ワキ「（ママ）　間「いそいて御通り候え

ワキ立笛ノ上ミヱ行　狂言ヲ呼出　ワキ「いかに誰か有　間「御前ニ候　「只今山伏達ヲも早いつく迄御通りニて有ふそ　「大方人（ニ）やとりの辺り迄御出有ふつるニて候　「汝ハ先江参り関（ママ）申候ハさいせんなりふ（ママ）じを申面ぼくなく候間所の名酒持ヲ参りたるよし申候え　「畏て候　イヤも早とこ迄おりやつたて有ふそ　先ッいそいておつ（ママ）かふ　イヤ是ニ御座候　いかに此内江案内申候　能力「案内とハ誰ニて渡り候そ　間「関守り申され候ハさいせんなあまりりうじ（ママ）を申めいわく仕候間所の名酒を持せて関守是まて参りて候間此よし御申有ツテ給り候え　能「夫レに御まち候え　其よし申入ふづるニて候　いかに申上候　関守り申され候ハ最前なりふ（ママ）しを申あまりめいわく仕候とて所の名酒持せ是まで参られて候　「此方江と申候え　「心得申候最前の人の渡り候か　「是ニ候　「其よし申て候えハいそキ御通り有レトノ御事ニて候　「心得申候　かう〳〵御通り有レとの御事ニて候

十三　舟弁慶　狂言上下　ワキツレノ跡付出後見座居る　ワキ呼出

「いかに此内江案内申候　狂「誰レニテ渡候そ　イヤ武蔵殿の御下向ニて候そ　「我君を御供申て候間御宿ヲ申され候え　「畏て候　「亦此度ヒハ御しのびの事ニて候間奥の間を用意有ツテ給り候え　「心得申候

「猶々明日ハ早々御立ヲニて候間舟を用意被成候え　「イヤ某随分足の早き舟を持テ候間御用次第ニ出し申そふつるニて候　先ツ〳〵奥の間江こう〳〵御通り候え

「ア、扨も〳〵只今静か御前の君江御名残りをおしまるゝていを見申て。イヤ我等テイの者まてらくるい致シ申候か。イヤ是も我君の被仰るゝ所も余儀ない事ハ　はる〳〵のはとふをしのき友（伴）もなわれん事。人口然るべからずとの仰せハ御尤至極の事じゃ。イヤゆわれぬ壱人ことを申そふより。先ツ武蔵江御伺ヒ申そふする

「主御見廻申上候　扨も只今静か御前の立別レ給ふ時に君江御心を残し置れたる躰を見申して我等ことき者まて落涙仕りて候が。武蔵殿何ニと思シめし候そ　「いかにも汝か申ことく我等も友（ママ）ニ落涙仕候　「イヤ此方ニも左様に思シめし候か　是も御尤な御事て御座る　誠にか様の御忍ヒの御下向も一旦御身ニとかのなき様仰せ分ケられんとの事なるに女姓（ママ）上臈の御供せんと言わるゝ　扨々けなげな御事ニて候　ワキ「夫レ付（ママ）キいそき御舟ヲ出そふづるニて候　実ニと御座舟の事を被仰候間用意仕置申て候かさ有らハ是江まわし申候　ワキ「いそいて出し候え　間「心得申候　爰ニてワキツレ論キ有　ワキツレ実ニ〳〵是ハ御断（ママ）り成ト諷ノ内　ワキ「舟（ママ）頭船を出シ候え　「畏て候　ワキ「立チサワギツ、舟ナ子ども　トステ　地「ヱイヤ〳〵ト言ウ塩（ママ）につれ御（ママ）舟を出シけり　ト此かへしの諷の内に舟ヲワキ座ノ前持ヲ出置舟ノ供（ママ）ヱ飛ヒスダリ　間「御舟にめされ候え　子方ワキツレ共舟江ノルトカイ竿ヲ取直シ　「武蔵殿御舟にめされ候え　ワキ舟ヱ乗ルト

「さらハ御舟を出シ申そふつる　ヤツトナ　ヱイ〳〵　イヤ武蔵殿江申上候　今日の御門ト出に一段の追イテ、目出度候　ワキ「イ（ママ）一段の天気ニて君にも御機嫌ニて候　間「是ハ猶々目出度ヒ事で御座る　ヱイ〳〵　扨而武蔵殿江申上候ハ此舟ハ新造の上くきかすかいも念の入打つめ今日ハ亦覚（ママ）別に舟子共も若者をすぐつて乗せまして御座るか武蔵殿ニは何ニと思シめし候そ　「イヤいづれも舟の手がそろい過分に候　「イヤ武蔵殿に左様に被仰るれハ我等ていも一段と勇サミ申候　ヱイ〳〵　イヤ武蔵殿江ちと訴（ママ）詔申上度儀御座りまするが是ハ何ニとで御座りましよウ　ワキ「夫レハ何ニ事ニて候ぞ　「イヤ別の事ても御座りませぬか此度の御下向ハ誠に不思儀（ママ）の御下向ニて候かイヤ是も上は同ウ一たいの御事なれバ頓而御中直らせられ目度（ママ）ウ御下向ハまの当りて御座るが其折りニは此四国西国の海上のかんとりをバ某シ壱人に被仰付て下されかし　此儀を宜敷ウ願ヒ上まする　「其儀ハ安キ間の事　取成シ申候べし　「イヤ夫レハ有難ウ御座りまする　さりなから今こせ（ママ）左様に心安ウ御請を被成れ共万ス思シ召スまゝに成ると御用繁ウて御失念の出ぬ様に此儀宜ウ願ヒ上ケます　ワキ「イヤ〳〵武蔵においてハ失念のなそ有まじく候　「イヤ此方ニそウ仰せらるれハ某シの願ヒハざつと

済た　ア、忝ヒ　ヱイ〳〵　ア、ラ不思儀ヤ　アノむこやまの方より見馴ぬ
雲か出た　アノ雲か出ると十角風に成りたかるかおひたゝしゆウ吹かねハよ
いか　ヱイ〳〵　イヤさればこそ段々雲てるハ　イヤ是ハ風か替ツた　され
こそ　イヤお気つかい被成まするな　さいせんも申上ケた通り此舟ハ新造事
成り　其上ニくきかすかひ念の入て打とめ有る也　亦か子共ハすぐツテ若者
ヲのせ其上私のかんとりに取り付いて居るからハ御心安うウ思シめしませ
やる事でハ御座りませぬ　ヱイ〳〵　イヤこと外おび只しゆウ成ツタ　是て
ハ成るま　皆々情を出し候え　肩はだぬキ　かうヤツトナ　ヱイ〳〵〳〵。ハ
アーされバこそあれから大キナ波か打ツテ来たハ　波よ〳〵〳〵〳〵〳〵
越セ〳〵〳〵　アリヤ〳〵〳〵　らーアーシィー　大ハアーッ●スル　間「イヤ
申只今様に申をかしましいと思シめしましようが波と申物はあのよふに言ウ
てをとしまするとまたやわらぐ物て御座りまする　ヱ、〳〵のかるな〳〵
ヱイ〳〵〳〵　ヲモカジ　ヱイ〳〵　ハアー亦タあれより大キナ波か打ツテ
来るハ　波がしらト言うて前ニ同し　ワキ「アら不思儀ヤ　風かわつて候　爰ニて
ツレト言葉掛合有　ワキ「何ニ事も武蔵ト舟頭ニ御まかせ候え　「アゝラ爰ナ
ア人ハ　最前舟に御のりやる時キから何にやら言々たそふなかほ付で有ツタ
ガはたして舟中で其様な鈍な事ヲ言う事か有る物カ　ゆわれぬ事を言ふより
舟のそこ江引付て成共いさしませ　ワキ「イヤ〳〵彼ノ者舟中不案内ニて
候間武蔵に免ンジテ給り候え　間「イヤ武蔵殿の仰せならバくるしゆウ御
座らぬか　アゝドンナ人てハ有よ
　是より後仕テニ成　地弁慶舟子にちからを合せ御舟をこぎのけ右輪によすれハト諷ウ時　ワキ
「舟ヲよせ候え　「畏て候　ヱイ　口伝有り

（以上、第一巻終り）

（注1）「共」に濁点あり。
（注2）「や」をミセケチとし、「あ」に改める。
（注3）「賀」に濁点あり。
（注4）「候」に濁点あり。
（注5）「出立水衣」とあるうち、「立水衣」をミセケチとする。

〔付記〕
本誌4号に翻刻した『狂言名寄・内外間名寄』に次のような誤りがあったので、この機会に訂正させていただく。

（誤）　（正）
○11頁上段7行　若布刈　→　和布刈

なお、同翻刻の（注4）として、「難読。扁は糸偏に近い。旁は「多」。次の字が「巻」なので「小手巻（緒環）」のことか」と記したことについて、橋本朝生氏より、「小手巻」を「綏巻」と表記する例がある由、御教示を得た。推測した通り、「おだまき」と読んでよいようである。記して謝意を表する。